平城宮跡の整備 (7)

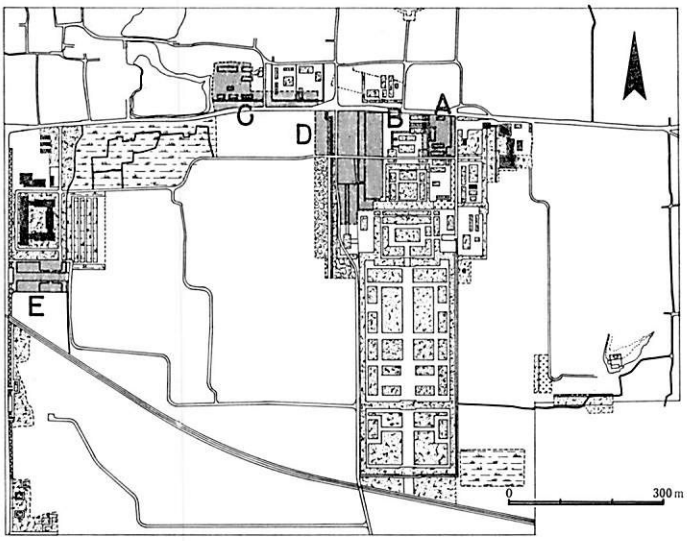
平城宮跡発掘調査部

1976年度の宮跡整備は，第2次内裏内郭および内郭築地回廊基壇復原整備，第2次内裏西方地区整備，北方官衙地区整備，緑陰帯造成，宮内道路造成および案内板の設置を行なった。

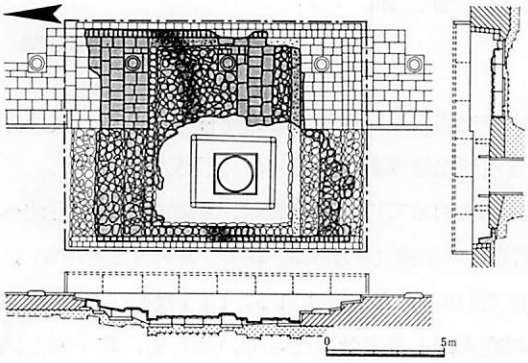
第2次内裏内郭築地回廊基壇復原整備　1974年度から始めている東辺築地回廊基壇の復原を北へ県道（通称一条通）までの約70m延長した。回廊には門跡（SB7970）および井戸（SE7900），内郭部には掘立柱建物4棟，玉石溝（SD7870）約115mなどが含まれる。（第1図A）　築地回廊の西内郭側はほぼ完全に復原したが，東側は現在水路と市道敷になっているため，昨年度と同様築地心より 2.5mまでを復原した。回廊の中央部西側で検出された井戸跡は，合成樹脂による現寸遺構模型を据え付け，遺構の欠失部はもとと同質材（切石は石川県産御音下凝灰岩，玉石は奈良市産三笠安山岩―通称カナンボ石）にて補充し復原した（第2図）。

井戸を中心とする施設は，回廊の西半をその一部に組入れ，東西8.3m南北12mの広さがある。井戸位置の地盤高は，回廊上面基準高より約1mの落差があり，東西辺は凝灰岩切石の擁壁，南北辺は敷石の施した階段を設けてふさぐ。階段は南北とも西半は踏面3段の玉石敷き，東半は下方の2段分を勾配を強くして1段とし，3段目以上は西半と合せている。但し踏面の寸法は北は1m，南は0.85mあり北の方が少し広い。井筒は，直径1.64mにおよぶ巨大な一木くりぬきの丸井筒で，地上部は一辺1.70mの方形枠を組んでいた。今回の復原では今後の維持管理のことも考慮し，丸井筒をコンクリートヒューム管に替え，地上方形枠のみ台桧材で復原製作して表示した。また井戸屋形の4本の掘立柱は60cmの高さに設置し，その間に凝灰岩切石をふせた。

合成樹脂による現寸遺構模型は，1973年度発掘調査の際にシリコン樹脂により型取りを行なったものを基に，ポリエステル樹脂，ガラスクロス，ロービングクロスなどを積層してすでに雄型をも製作済みである。これの設置にあたっては，遺構面を砂養生した上に1m×1m×0.12mのプレキャストコンクリート版の基礎を伏せ，基礎と模型本体との空隙はL形鋼（50×50×6）



第1図　平城宮跡整備図



第2図　井戸跡復原図

でフレームをつくり支持体とした。

模型面は回廊にあわせて遺構面より0.7m上りを復原高さとした。基礎高さとフレーム高さは遺構の状態が場所によって異なるため一定寸法には納まらず，模型本体を6個に分割し，その個々について妥当な位置・高さをきめ据えつけた。

その他特に配慮した点としてプレキャストコンクリート版間をアスファルトで充塡しその移動をふせぐと共に漏水処理を容易にしたこと，L型鋼は樹脂の皮膜で覆い防錆を図ったこと，フレーム外周はコンクリートブロックを積上げ土砂や水が直接入り込まないようにしたこと，などがあげられる。ただ露出展示であるため樹脂模型が直接外気にさらされることになり，温度差による膨張・収縮や紫外線による褪色の問題など耐久性について今後の経年変化をみきわめていく必要があろう。

内裏西方地区整備　1974年度より継続で進められてきた第2次内裏朝堂院地区の整備は，その中心地区については北西部を残すのみとなった。この地区は未発掘地であり，遺構の詳細については未確認であるが，周辺の整備の進行につれ環境整備が望まれるようになって来た。そこで東辺築地回廊と対称の位置に想定される西辺築地回廊の基壇を盛土張芝により表示し，回廊に囲まれた内裏空間を明確にすると共に第2次内裏朝堂院の中心地区について整備を完了するよう約11,800㎡について施工した（第1図B）。この地区では前述の築地回廊基壇の表示（延長180m）を行ない，回廊の両側は整地しクローバーの種子吹付け，西側外郭部には1本/150㎡程度の樹木植栽を行なうにとどめた。また1975年度に整備した外郭西南隅の礎石建物より始めた苑路（幅員5m砕石舗装）を北へ構内道路までの約110mを延長した。

北方官衙地区整備　北方官衙地区については1971・72年度の既整備地の西側で，1条通の北側を佐紀池東堤までの整備を行なった。施工区は発掘次数では2，4，6，81次調査にあたり，奈良時代後半（平城宮B期）の遺構を採り掘立柱建物8棟，築地塀185m，柵列36mおよび井戸跡3ケ所の復原表示を行なった。工法は掘立柱建物，築地塀，柵列については盛土張芝とし，掘立柱位置をツゲの植栽，築地塀をサザンカの植え込みにより表示し，井戸跡については，出土した井戸枠を新材（台桧）により製作し各々1段分を復原設置した（第1図C）。

緑陰帯造成　これまで資料館と覆屋を結ぶ構内道路以南を順次整備して来たが，今年度は第87次発掘調査で確認された1条通りから南へ構内道路までの約80mについて造成した。和泉砂岩割石で復原表示を行なっている南北大溝（SD3715）は，今年度施工区が水路上端となるため佐紀池より取水している灌水施設の装置を1部利用し，自動給水し日中水を流すようにした。また水路内に常時滞水するように4ケ所の堰を設け，同時に水の浄化を図った（第1図D）。

宮内道路造成 1971年度に復原整備した西面中門から東へ約110mについて施工した。復原道路は門基壇より幅員16mの砂利舗装をし，その両側は和泉砂岩割石溝（幅40cm）で道路排水を行なうようにした。また北側脇門から資料館に至る通路として，脇門幅（4.5m）で東へ資料館東側構内道路と結ぶ苑路を造成した。この苑路については今後車輛の通行も考えられるのでアスファルト舗装とした。またシーズンには資料館北側に設けている駐車場面積が不足する事が多くなるため，この苑路沿いに駐車場を設け混雑時の緩和を図った。復原道路の両側は盛土張芝をし2本/100㎡程度の樹木植栽を行なった。

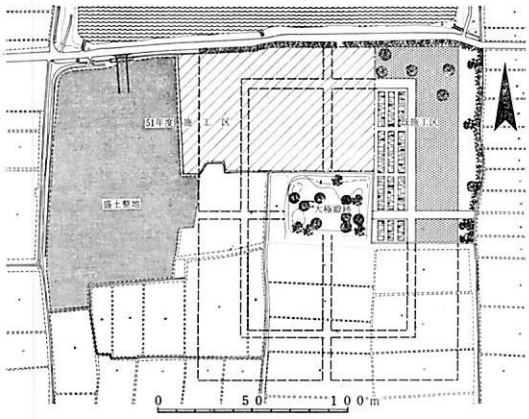
そ の 他 内裏内郭回廊部に復原した井戸施設の案内板を設置したほか，1970年以前に奈良県で設置していた案内板の説明図と現況とが発掘調査の進捗に伴い一致しない部分が多くなったため，説明図の修正貼り替えを8基について実施した。 （渡辺 康史）

	第2次内裏内郭回廊復原	内裏西方地区	北方官衙地区	緑 陰 帯	宮内道路	案内板
整備規模	5,950㎡	11,800㎡	11,100㎡	2,740㎡	7,040㎡	9基
工 費	31,200千円	31,000千円	30,200千円	8,000千円	23,800千円	1,290千円

藤原宮跡の整備 (2)

飛鳥藤原宮跡発掘調査部・平城宮跡発掘調査部

1975年度に大極殿東北部から整備を始めたが，その西部（旧鴨公小学校跡地）が1976・77年度発掘調査予定地になっているため，今年度は小学校跡地（5,750㎡）の校舎基礎を処理するにとどめ，大極殿回廊外側北西部（約8,500㎡）の盛土整地を行なった。この地区は大極殿地区より約1m低く，道路を隔て北側にある醍醐池に水を引くために大極殿より南一帯の水が集中し，非常に湿潤で草刈作業等管理作業に困難を生じていた。また遺構が少ないことや将来大極殿地区の整備に関連して旧水田面より平均40mの盛土を行ない整地して，見学者の休憩，軽い運動等の使用も可能な多目的広場とした。この広場への進入路（幅員5.5m）を北側市道に取り付け，市道南側の水路部分はコンクリート橋とし，その上・下流共4.5mについて護岸工事を行なった。なお工費は21,000千円であった。 （渡辺 康史）



藤原宮跡整備図